

社 説

◎明治三十四年を送る

◎第十六議會

論 説

◎德川時代の救濟事業

◎臺灣の佛教(下)

安達愚佛

柴田常惠

改教時報

第九十六號

雜 録

◎先德餘香(其九)

◎大草慈善出獄人成績

信 界

◎人の我ど憎む時に

社 會

◎議會の開院式◎明治三十四年の宗教界◎田中正造氏◎教界彙報◎紛々録

文學士本多高陽郎

百目木劍虹

大日本佛教徒同盟會綱領

- 一、佛教本來の面目を發揮して各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を奨勵し其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奨勵して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勸絶する事。
- 十一、殖民傳道を奨勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

明治三十四年を送る

明治三十四年といへば、指したる意味もあらざる如くなくれども、之を第二十世紀劈頭第一年と言ひ換ふれば、何となく意味ありげに聞ゆるなり、此意味ある此一年を如何なる覺悟を以て迎へたるかは、予輩は本年の初刊に於て告白したり、彼が如き大々的覺悟を以て歡迎せし此一年も、今や既に之を經過して之を送らんとするに際して、其經過の跡を顧みる時は、眞個世爾に堪へざるものあり、予輩は健全なる宗教界を形成せんことを絶叫したりき、而して今日の實際は歩趨を此傾向に進めつゝありや否や、予輩は第廿世紀の事業として宗教的問題を振興せしむべしと論張したりき、而して此第一年の發展は第一步を其方向に向て運び出したりや否や、予輩は負目を以て見るも、然りと肯定的返答を與ふる勇氣は殆ど無からんとするに苦しむ、然れども此一年に於て宗教家の爲せる事業全く無きにあらす、東西本願寺が各其最高教育機關たる大學を東都に移したり、曹洞宗が其地方行政機關が從來自治に放任して、鬼角に振はざるを以て、盡く其財政を中央宗務局に集めんと圖れるなり、尾大不掉の弊に陥れる同宗には是亦一改善なるべし、其他淨土宗が大土工を企てたる、喇嘛貫主の來朝、眞宗本願寺派築地別院の落成、基督教徒の大舉傳

第十六議會

第十六議會は去る七日を以て招集せられたり、不景氣の東京も今後九旬間は稍景氣附くなるべし、願ふに衆議員三百の選良には此一議會を以て袂を分たざるべからず、今期議會は實に我帝國が議會開設以來施行し來りし舊選舉法によりて、選出せられし代議士諸君が最終の活劇舞臺なり、此一期間諸君は如何に演奏せらるゝやは、徐ろに實地を傍觀すべし、唯茲に少しく注意すべきは、余輩は來る第十七議會に於ては、

社説
○政教時報第六十八號目次
○教學科新設の必要を論じて國家の任務に及ぶ
○佛教の慈悲を論じて紳士の遊獵に及ぶ
○生理道徳及び宗教の生活
○臺灣の佛教
○先徳餘香
○泡沫錄
○人生の兩極
○遊二日誌
○モルモン宗等

社説
○本誌廣告
本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は本郷森川町郵便貯金爲替取扱所宛の事
爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし
東京市本郷森川町一番地
發行所 大日本佛教徒同盟會出版部
明治三十四年十二月十四日印刷
明治三十四年十二月十五日發行
發行兼編輯人 百目木智雄
印刷人 清水朝太郎

明治三十四年といへば、指したる意味もあらざる如くなくれども、之を第二十世紀劈頭第一年と言ひ換ふれば、何となく意味ありげに聞ゆるなり、此意味ある此一年を如何なる覺悟を以て迎へたるかは、予輩は本年の初刊に於て告白したり、彼が如き大々的覺悟を以て歡迎せし此一年も、今や既に之を經過して之を送らんとするに際して、其經過の跡を顧みる時は、眞個世爾に堪へざるものあり、予輩は健全なる宗教界を形成せんことを絶叫したりき、而して今日の實際は歩趨を此傾向に進めつゝありや否や、予輩は第廿世紀の事業として宗教的問題を振興せしむべしと論張したりき、而して此第一年の發展は第一步を其方向に向て運び出したりや否や、予輩は負目を以て見るも、然りと肯定的返答を與ふる勇氣は殆ど無からんとするに苦しむ、然れども此一年に於て宗教家の爲せる事業全く無きにあらす、東西本願寺が各其最高教育機關たる大學を東都に移したり、曹洞宗が其地方行政機關が從來自治に放任して、鬼角に振はざるを以て、盡く其財政を中央宗務局に集めんと圖れるなり、尾大不掉の弊に陥れる同宗には是亦一改善なるべし、其他淨土宗が大土工を企てたる、喇嘛貫主の來朝、眞宗本願寺派築地別院の落成、基督教徒の大舉傳

新選舉法に由りて選出せらるべき新議員を迎へざるべからず、此新議員は如何なる顏面を以て充たさるべきやは、今より豫想し得べからずと雖も、今の如き腐敗せる議員を一掃して最健全なる、不拔なる元氣と精神とを有する良議員を得んことを希ふや切なり、是等衆議院を得んと欲せば、國民は是非共被選舉者の信仰の有無を査察せざるべからず、何となれば腦裡一片の信仰無き人にありては、假令敏腕廣才なるも、浮萍の波此の岸邊に波と風に任せて寄せるが如く、飛鳥川の淵瀬定りなきが如く、到底清新健全なる元氣も適往不拔なる精神も有り得べからざれば、銅臭一たび鼻に付けば腐蝕せられ、權勢眼前に一閃すれば忽ち阿附し、操守もなく、主張もなく、以て國民の信頼に背くもの少からず、今の議員を腐敗と呼び、墮落と評するも其由て來る所は、皆彼等の腦中絶てて信仰てふもの、痕跡をも留めざるに由らざるべからざるなり、然れども是決して彼等議員諸氏ののみ責むべからざるなり、其腐敗の淵源する處は、國民が神聖なる貴重なる代議士選舉を慎みずして、單に一片の義理立を以て投票するあり、又少許の賄賂を握みて唯々諸々神聖なる投票權を賣るもあり、或は所謂壯士なる者の威嚇を恐れて、心にも、無き者を選挙するもあり、或は如上の事情にて貴重なる投票權を放棄するもあり又唯唯倒なり手敷なりとて、譯もなく投票權を棄つるもあり、斯の如き國民は不熱心なりと謂はんか、不親切なりと評せんか、權利義務の思想に幼稚なりと稱せんか、何れにしても文明世界に住する法治國民の行爲と言ふべからざる

なり、大凡そ國民は立法院に向て代表者を選出すべき權利ありと共に、又適當の代議士を選出して、立法院を健全清新ならしむべき重大なる義務を負ふ者なり、其投票を輕忽にし若くは遺棄する如きは、神聖なる投票權其者を汚し、個人に取ては、貴重なる權利を放棄するのみならず、重大なる義務を盡さざる者なり、安んぞ之を責めざるべけんや、今暇りに我國民が代議士選舉を慎まざる一例を擧ぐれば、從來數度の議員選舉に於て、選舉者諸氏は、被選舉者諸氏の信仰の有無を考査せし事ありや否や、被選舉候補者の宗教の如何を審查せし事ありや、實に信仰は人の精神をして清新健全ならしめ、其行為をして遠在致爲ならしむる源泉なり、古昔聖賢の跡を見よ釋尊が富貴榮華の王宮を棄て、勤苦六年せしは何に由るか、達磨大師が梁武帝を叱咤して少林山中に面壁九年の苦行を積みしは、何に由りて然るか、孔明尼が磨滅するに暇をらず、天下を周遊せしは其源泉何處にかある、親鸞聖人が流涕の罪を得ながら、師教の恩致なりと喜び、是に因りて廣く邊鄙の群類を化すべしと勇みしものは抑山りて然らしむる所のもの無かるべからざるにあらざるや之皆一片晃々たる信仰の胸中に燃ゆる者あるに由らすんばあらざるなり三軍帥を奮ふべし、匹夫も志を奮ふべからずと絶叫せし古人我を欺かざるなり、實に從來我國民が議員被選舉者に向て、信仰の有無、宗教の如何を問はざりしは、一大缺典と言はざるべからず、歐米先進國の國民には決して斯る疎漏迂愚はあらざるなり、我國は法治國民となりて以來、未だ日淺きを以て、斯る疎漏も免るべ

からずとするも、人々各自に自個頭上に利害の關係を被るべきものなれば、爾來は今少しく親切に考へて、權利の伸張と同時に義務を盡すことに注意せざるべからず、今回議員選舉法改正に際して、第一着に注意すべきは、選舉人は力めて自己と同一信仰の代議士を選出せんことに力むるにあり、是れ田水引論に似たれども、實は最肝要の事なり、猶他日を待て詳論する所あるべし、

論說

徳川時代の救済事業(承前)

安達愚佛

人足寄場は最初は輕罪にて敲き拂ひに處せられたもので引取人のないものと浮浪無宿の徒を引取る所であつたが天保の初年水野越前守忠邦の大改革后からは江戸拂以上の者も悉く寄場へ送り込む事となつた其取扱方は天保十四年に寄場奉行から閣老へ書出したものに依ると左の通りである

凡人足寄場は江戸拂以上追放の者又は府内を徘徊する無宿の徒を評定所一座又は火付盜賊改より引渡し來る時は之を受取り寄場に於て本人の姓名年齢出生の國郡町村父母の存亡並其職業及び何の罪科にて何の刑にせられたる等の事又無宿者に在りては其無宿となりたる原因を具さに問糺し其口供に押印を取り次に寄場條目を讀み聞かせ夫より着用の衣類を脱がせ定

服に着替させ月代を剃らしむるなり條目讀聞かせの時時は元締役並下役は素より當日見廻りの町方與方同心小人目附一同列席の上白洲に於て威儀嚴肅に元締役之を朗讀するなり其條目は度々改正せられたれども何れも大同小異のものなれば寛政二年に定めたる同所の趣意に關するもの一條と同十年二月に定めたる條目を掲げん

其方共儀無宿の者に付佐州表へ可差遣處此度厚き御仁恵を以て加役方人足に致し寄場へ遣はし銘々仕覺候手業を申付候舊來の志を相改め實意に立かへり職業を出精いたし元手にも有付候様に可致候身元見届候は、年月の多少に構ひなく右場所を免し百姓素性の者は相應の地所を下され江戸出生の者は出生場所へ店をもたせ家業致さす可く候尤も公儀よりも職業道具下され候歟又は其始末により相應の御手當可有之歟若し又御仁恵の旨をも辨へず申付に背き職業無精いたし候歟或は悪事等於有之者重き御仕置可申付者也

寄場人足どもへ申渡條目
一此度人足に申付候上は職業出精致し渡世相續可致體に成候ものは寄場差免し家業可相成程の手當差遣し身寄の者へ引渡し身寄無之ものは出生の所名主或は地役人に引渡し家業相續爲致候事

一寄場逃去り候もの 始末に依り死罪
一於寄場盗いたし候者 或は死罪入累敲
一徒黨々間敷儀いたし候者 死罪(始末に依り御定書に準じ御仕置可申付候)

一 於寄場博奕いたし候者 死罪或は遠島重敲
 一 職業不精又は申付を用ひざる者 手錠入牢其始末に依り各
 申付候而も用ひざるに於ては遠島申付候事
 一 博奕又は悪巧致し候者有之趣申出候ものへは其品に依り相
 應の褒美を可差遣候事
 一 門外へ出候儀堅く可爲無用事
 一 火の元入念大切に可致候事

此度御仁恵を以て佐州並在溜差免し候上者右の條々堅相守
 銘々職業可致出精もの也

右は入場の始め申開けらるゝ所の掟の大體なれども元來入場
 せる者の中には元重罪犯たりし者もあれば單に無宿者もあり
 又老若あり幼年あり病者婦人もありて前記一定の仕置の如く
 爲すに忍びざる者あり左に連一旦仕置書を定めて其通りに行
 はざれば依怙の沙汰となる事なれば種々なる事故の生ずる毎
 に奉行より上申して上裁を仰ぎ後には仕置書も頗る條目を増
 加したるが大體に於ては前記の者を土臺として之に人物と事
 故に依り等差を加へたる者である例へば同じ逃走したるもの
 にも金銭物品を窃取して逃げたるものと單に逃走したるもの
 と區別を立て又使ひ先より逃げて歸らぬものと同じ取り逃げ
 にも其取りたるもの、多少に依りて差別し或ひは寄場より
 奉公に出したる後其年期の内に欠落したるもの或は二人以上
 逃走を企てたるも後難を恐れて逃げざりし者無斷にて圍ひ外
 に出て逃げたるに均しき所行ありし者無斷外出夜に入りて
 歸りたる者許可を得て外出したる儘歸らざる者又は許可の時

間を遅れて歸りたる者或は非人番の所屬の者が其身分を隠し
 て寄場に居りたる者等逃走といへる中にも種々の事情ありて
 之を一律の下には規しがたいのであつた又其中には何れも幼
 年者があるから是も亦壯年のものと均しく論しがたく遂に斯
 る事情から其條が一年に増加したものであるが總て十五
 歳以下のものは大人の仕置より一等級軽く申付るといふ事にな
 つて居た

享保元年寄場創立十二年目七月岡部内記(加役方か)の掛り
 甲州無宿のカネといへる女を寄場へ送付して來たとがあつた
 寄場にては是が創立以來始めての女子であるから取締上甚だ
 困たなれども素より無宿に入るべき所であるから止むを得ず
 寄場内へ特別の居所を取繕ふて入れ置き當時の寄場奉行松平
 田宮から從來は男無宿のみ引取り來り未だ一回も女子を引取
 りた事はなかりしに今回の様に突然引渡されては甚だ困却する
 是まで引取た事がない位であるから將來も差して必要はある
 まいから此度送られたカネは溜へなりとも引渡す事に致した
 いと云ふ事を伺ひ出た所が町奉行は伺之通以來女は寄場へ差
 遣はさず萬一差遣はさずしては叶はぬ節は何の上取計ふべし
 との沙汰になつて其後は如何になつたものか達書又は伺書の
 如きものも更に見當らぬのである併しながら太田南畝先生の
 一語一言に人足寄場の圖面が載てあるが其中には女置場とい
 ふが設けてある左れば其後間もなく女置場が設けられたもの
 と見へる爰に少しく解せられぬ事は江戸會誌に依ると石川大
 隅守は寛政三年に麹町に宅替して其屋敷跡は寄場の附屬地と

なつたと記してある女子の事に就ては夫より十一年目の享和
 元年に始めて送て來たのを松平田宮から斷たのであるから女
 置場の出來たのは其以後の事に相違ない然るに此圖には女置
 場も大隅守の屋敷も見へて居る太田先生は文政六年に七十五
 で死な人であるから享和以後女置場が出来て後に寫したもので
 其節は無論大隅守は居ないけれど石川島と名くる有名な所
 であるから分り易き爲めに斯の如く書かれたものであらう入
 場者の内能場規を守り業務に勉強して改悛の効著しと認るも
 の、内親戚知人の引取方を願出る者ある時は願人の身元を
 調査して之を引取らしめ又同様の者にて引取人なきものは寄
 場より店を持たせ遣はし何れも入場中職業に依りて預り遣き
 たる金は素より此外仕着代と資本金とを給與して再び浮浪徒
 たらしめざる様にしたのである

入場者が病氣に罹りたる時は重きは病室に移し輕きは自室に
 て服薬せしむ病室には入場者の内より親切なる者を選びて看
 護人とし藥餌其他の世話を爲さしめ皮膚病を患ふる者には藥
 湯の備へありて日々之に入浴治療せしむ病人の食料は木麥等
 分四合の定めにて朝夕に香の物と汁とを與へ病中は特に手業
 の貯金額を定めて下渡し本人嗜好の食物を購入する事を許し
 てあつた醫師は豫て三人扶持を給與せる定醫があつて病人の
 模様依りては日々或ひは隔日に來場して診察治療に従事し
 藥物は時價を以て買上げて與へるのである醫員の來場せる時
 食時に際すれば一汁一菜付の膳部を出す事であつた
 死亡者ある時は元締役同下役の内一名、町方與方同心、小人

目附等が立會檢視の上に納棺し千住にありし回向院の墓
 へ送りて埋葬するので其時は下役一名付添人足手代り三人に
 て送るので誠に鄭重なる仕方でありし

前に記したる條目は中々峻嚴なれども實地嚴刑に處する事は
 稀れにて屢罪を犯すとか役人の指揮に従わぬ爲に到底寄場に
 置がたき者は佐渡金山の水替人足に送るとか又は町奉行に引
 渡して監獄に送るのであつた若し火災があつて寄場に延焼の
 憂ありと認れた時は鎮火後三日間に立戻るか又は其居所を届け
 出つべき旨を申開けて勝手に出て行かしのむるのである
 同場役員の勤方は吟味役元締役以下日々の出勤にて元締役は
 一名宛宿直し下役は隔日宿直にて不寐番をも勤むるのである
 役員勤務中の食は事後所賄にて朝晝は一汁一菜晩は一菜の膳
 部を給し下役は金にて支給し一日銀一匁の割にて出勤日數に
 應じて給與せられた
 經費の事は前に記したるが其割合は天保八年より十二年まで
 五ヶ年平均入場者一人當りが米一石五斗六升麥七斗九升六合
 銀百七十二匁五分餘に當りしといふ事である併し是は入場者
 の諸費は素より役所の諸雜費一切を總計したる一人當りであ
 る

臺灣の佛教

(下)

柴田常惠

臺灣佛教をして然かく失敗に歸せしめたるもの、僧侶諸師
 の熱誠足らざるに由りしと雖も、抑もまた其事情に疎く、猥り
 に宗教の易きを見て其難きを願ふりに基かずんばならず、

(一)我領土なり(二)同文の民なり(三)古來佛を信する徒なりとは、實に其易きをのみ見たるものならずや、然かも知らず之あるが爲に幾何の便益を享有したる。

(一)云ふが如く馬關條約に依り臺灣の主權は我に歸したりと雖も、そは唯政令の我より發せらるゝに止り、芥子の如き磨と豆の如き抱負を以て我當局者が憚々焉ひたすら土人の歡心を迎ふるに汲々たりとて、奚んぞ威信の其間に高まるあらんや、宜なり風俗習慣は毫も移らず依然として陋態舊の如く、民心の向ふ所旭日曠々たる我帝國にあらすして、夕陽没する西の方清國を躡望し、陽に我を尊んで密にうの失政を欲するのみ、見よ領臺以來既に七歳、三百餘萬の土民中能く辨髪を絶り得しもの果して幾何ぞ、多くも一百の上に出でざるべし、况や近者鬪鬪の輕躁を悔ひて再び蓄ふる如きこれ何の微ぞ、當局者の無能と民心の我に歸せざる略ぼ察すべからずや、此の如くんば我領土たりとて布教の便益爲に生ずべき、敢て清韓の國教と擇ぶべきを見ず、偶得る所は徒らに信徒章を受けて思良を裝ひ淳撲を示して上に誦はんとするに過ぎず、我は恐る群小俗吏の汚行は内地人輕侮の念を起さしめ、却て累を僧侶諸師に及ぼして疑懼の念を延くなきか、故に云く我領土の故を以て布教の便を感じるなしと。

(二)また同文の民と稱するも、教育廣く及ばずして文字を解するもの多からず、其文は唐宋の文にあらすして所謂近代の俗文なり、邦人の詩を能くするものは之あり、文を能くするものは少し、之を能くするものは之あらん、所謂俗文を能くす

るものに至ては極めて寡し、是を以て我の能くする所は彼の知る所にあらす、彼の知る所は我の能くする所にあらす、若夫れ僧侶諸師の學殖に想到せんか、眉目清秀能く婦女を顧眄せしむるものは之あり、輕快敏捷巧に土人の意を迎るものは之あり、詩文に熟達するもの果して幾人かある、また能く之を布教の上に利用するものに至ては寂々寥々曉天の星も更なり、此の如くにして同文の民と稱するも、豈以て布教に資する所あるべき、况や宗教の弘布は文筆よりも辨舌に、辨舌よりも實踐にあるに於てをや。

(三)古來佛を信する徒なりと云ふが如きは、極めて大なる誤謬に陥るものなり、試に臺地從來の宗教を序せんか、佛、儒、道、耶の四教あり、耶蘇教は近年英米佛の外國宣教師に依りて傳へられ、新舊の兩派存するも勢力の大なるは活氣の盛なるは新教にして、土人傳道師を用ひ熱心布教に従事し、範圍殆んど全島に及び、其方法略は内地の耶蘇教と同じく病院を建て學校を設け、其績頗る巨べのあるも、守舊の性と自大の會は土民をして未だ多く之を信せしめず、爲に充分の驥足を延すに至らず、占領後別に内地より派遣の日本基督教ありと雖も、此は會堂を臺北、基隆に置き専ら内地人の方面に向くるのみ、

道教は所謂黃老の道にして妄誕奇怪の説をなし固より一定の信徒なく、或ひは占ひ事あれば祈り、其道士は淺學無識、妻を有し肉を食ひ、舉措常人の如く從て毫も尊敬を受くることなく、禁厭祈禱を以て僅に其日を送るに過ぎず

儒教は即ち古來支那民族の尊ぶ所なるも、唯讀書人の間に限られ其數多からず、時に衆人を會して學者の仁義を解くことなるも僧侶のありて法を説くと等しからず、故に其獨りを慎むに止まりて其化廣からず、而も其死するや佛又は道式を以て葬らる、

佛敎に二あり、普通佛敎と稱するは曖昧なるものにして一種の迷信に過ぎず、其僧侶は暗愚鬼鈍、人之を輕と髮を剃り頭上三對の灸點をなし衣服沓靴の制常人と異り、家には妻子あり口には魚獸の肉を以てし、葬祭祈禱の禮物に依り糊口す、其狀全く内地のそれに似て而も其度之に過ぎ腐敗の極に達す、他は比較的尙多少の生命あるものにして先天、後天、金堂の三あり、先天敎は達摩より後七祖に出で、同治中北京より臺南に傳へられ、蔡派翁派の二流ありと雖も其間別に差あるを見ず蔡派遂に盛なり、拜する所は釋迦、觀音及び始祖住世老爺にして、朝夕金剛經を誦しまだ大懺經を用ひ、寺堂あるも本寺なく僧侶なく、讀經祈禱に信徒互に之を爲し敢て布施を受けず、噉肉妻帯を禁じ頗る嚴格なる宗派なり、故を以て信徒甚だ少なし、後天敎は約四十年前臺灣に傳はり、寺あり、僧あり、其信徒は先天敎の如く嚴格ならずして妻子を有するも、肉と辛とを食はず、土俗菜食を尊ぶを以て其信徒は常人より敬せらる、金堂敎の信徒は肉食妻帯全く常人に同じく、三教共に臺中、新竹附近に行はれ後二敎を盛なりとす、而して後天と云ひ金堂と云ふ先天敎より分立せしに過ぎず、其教義我禪宗と大差あり

るを認めす
此の如く彼の三敎の信徒を除きては、何を以て古來佛を信する徒と稱し得べき、然も其信徒や極めて少く大多數の土民は實に奇怪なる偶像を拜し、暗昧なる迷信の途に彷徨するもののみ、犠牲を供へ身を傷けて神を祀り、富貴長壽を祈るの外また他あるを知らず、利己の念妄りに強く豺狼の慾徒らに烈し、此の如きもの何ぞ古來佛を信する徒と云ふべけん、持むべからざるを恃み、易からざるを易しとし、遂に臺灣布教の失敗に歸したるものまた故ある哉。

臺灣は光榮ある廿七八年後恰好の紀念物なり、我祖先が熊襲を同化し蝦夷を拓きて今日あるが如く、その土民を混和して鞏固なる國家の一分子とし、永く後昆に傳へざるべからず、國民の團結は薄弱なる政治機關の統一を以て能事するにあらす、宜しく其利害を同ふし言語風俗を等ふし、始めてシユレウツク、ホルスタインの獨逸聯邦に於けるが如きを見ん、苟も國を憂ふるもの官民心を一にし、之が開發と同化に力めずして可ならんや、然も當局者その明なく民に其人なし、徒らに錙銖の利を射るに汲々し、紛々擾々たる誠に慨かほしからすや、此に於てか益々熱誠なる僧侶諸師の奮勵を願ふの切なるを望む。

僧侶諸師の任重く道遠きこと此の如きに拘はらず、一敗また起つ能はずして、姑息憚安、無意識的の讀經と固陋なる説教を事とし、時に三面記事の材料を供給して醜聲を世に漏し、偶事をなすや曰く法會曰く追吊、何れ御祭り好きなる、甚

しきに至ては、内地人の愚蒙を利とし、辨天、稻荷、弘法、清正等を祠り、祈禱禁厭に務めて益々迷信の深淵に導き、己れ獨り口腹の慾に飽んとす、布教僧の任うれ此の如きものか各宗本山豈斯くあらしめんとして絶海の地に布教僧を送らんや、斷々乎その陋を鳴さざるを得ず、本山當路者の無定見と經費の乏しきとは、勢ひ、士民布教を試むる餘裕なく、退て内地人の布教となり、信施の多きに力むるは或は止むなきあらんも、毫も精神的躍々たる活動を見ず、遂に弊の此に至るも嗚呼うれ誰の罪を嗚呼うれ誰の罪ぞ。

社 會

議會の開院式

第十六議會の所感に付ては前項社説に於て述べたり、而して議會は愈々去る十日、車駕親臨して開院式を擧げさせられ左の勅語を下し賜ふ

朕は帝國と縮盟列國との交際益々親厚を加ふるを喜ぶ北清の事變に就ては列國と協同して當初の冀望を達し善後の計亦將さに成を告げんとす朕は文武臣僚の勵精及各員の協賛に依り帝國の光輝を宣揚したるを嘉みす
朕は國務大臣に命じて明治三十五年度の豫算及各般の法律

案を提出せしむ卿等國家の要務に對し和衷審議以て協贊の任を竭し朕が望む所に副へよ

明治三十四年の宗教界

鳥兔匆匆として今年も剩す所幾何もあらず、一年三百六十五日敢て短しとせず、而も光陰の過ぎ易を嘆するは何ぞや、吾人の所期踳跲として事志と違ひ十か一だも成し得ざれば也、吾人か新年の鬢頭に於て讀者諸君に誓ひしことの多くは畫餅に歸したるを深く謝せざるべからず、去れど我宗界刷新の事や、社會事業の着手や何等の効を奏せしを知らずと雖も亦一線の火影のかややくを見ん、此火他日腐敗せる教界の荒原を焼き盡すを得ば吾人の微志聊か達したりと云ふべきか、是等の事固より吾人一人の能くする所ならんや、我讀者諸君も亦其責任を分つの覺悟なかるべからず

今茲に少しく本年の教界に於ける出來事を略述し、讀者諸君と共に將來研究の資料となさんとす、先づ最も吾人の注意を促せしはラマ教僧の來韓是れなり、ラマ僧の渡來や表面上觀光の遊覽に過ぎざりしも、茲には明に斷言し難きも外交上の意味を含みつゝありしことは、魯國政府の其舉動に注目されしに依りて知らるゝ也、我政府固より智也、其待遇の如き東本願寺に一任して恬として我れ關せざるものゝ如くしぬ獨り政治上の事のみならず、吾宗教家が西藏探検に心膽を碎き異邦土異風俗を事とせず、梅風、沐雨、千山萬嶽の間を往來

して尙其目的を達すること匪はざりしに、ラマ教僧の來朝に依て聊か其端緒を開くを得て寺本婉雅氏か去月渡滄したるは全く入藏の素志を貫かんが爲めなり、

次に奇怪の現象なるはモルモン宗の渡來なりとす、一夫多妻主義の妖教、彼れ何の見る所ありて萬里の波濤を冒し我國に來りて傳道せんとするや、從來の佛敎に加ふるに四十有餘派の基督教あり、宗教の多きに苦める我國は人倫の大義を惑亂する、此妖教を容るゝの度量あるに至ては驚かんとするも豈に驚ざるを得んや、當局者の腰の弱きにあされざるを得ず、次に新聞紙上盛に攻撃されいたく屏息したる阿云婆羅摩の起るあり、如斯妖教出現して我教界を擾亂するに至ては、教界の前途頗る寒心に堪へざる也、彼れアウンバラマ今如何の狀をなすや、世人が漸く彼を忘れんとする間に、例の妖法を説き其勢力を扶植し居るやも知るべからず、徒に雲烟に付するは吾人の取らざる所也、

次に吾人の視聽を惹きしものは廿世紀大學傳道是なり、基督教は徹頭徹尾山師的也、其聲を大にし其色を盛にするは彼等の常手段なり一人の信徒を得れば百人の信徒と稱し、十人を得れば千人と稱す、彼等は實に瞞着にあらざれば、法螺的なり内に活火炎たる信念の燃るなしと雖も、壇上に立てば臆面もなく、泣くが如く訴ふるか如く狂者の態度を以て、天帝を説き十字架を語るに到り盡さざるなし、然れども如斯にして布教弘法の績顯著なりとせば、沈黙無爲にして終る消極的佛敎者に勝ること數等なりとす、

基督教の彼が如く意氣壯なるにも拘らず佛敎者は意氣銷沈何等の爲す所なく信仰の渴聲をき、つゝ宗教の水を興へんともせず、袖手傍觀、他人のなすを見ては是れ宗教の本領に背くもの、宗教家の爲すべきものにわらずと冷笑一番、徒に嫉妬の腹毒をもやすに過ぎず、自ら生涯の覺悟を以て宗教的事業に盡すもの、又盡さんとするもの殆ど絶無と云ふて可なり、海外布教の如き美名を貪るよりは固然之を閉鎖し、力を専心内地の布教に注ぐに若かざるなり、

西本願寺の慈善財團は一向振はざる也、財政裕なりと云はる、西本願寺由來活動的の事業に乏し、此好個の問題を捕へ來て尙成すを得ずんば、人は漸く鼎の輕重を問ふにいたらむ東本願寺は例によりて財政上の困難に遇ひ、活動的の事業に乏しきは固より其所ならむ、而して此の困難の中に十萬餘金を擲ちて眞宗大學を東京に移したるは果斷と云ふべし、於此乎東西本願寺は一は高輪に一は巢鴨の地に最高の教育府を移し、大に宗教家を養成せんことに勉めらるゝは聊か快事とすべし、吾人は彼等の教育方針に付て多少言ひたき事あれども、之は他日を待て論ずることとせん、曹洞宗淨土宗の事は別項社説に於て少しく論じたるを以て、爰に煩を避けて再び云はざるべし、其他各宗の出來事は吾人多く聞く所なきを以て此に云ふこと匪はざる也、

新佛敎の諸氏がユニテリアン會堂をかりて時々佛敎演説を開くこと、精神界の諸氏も近頃浩浩洞に於て學生を集めて信仰上の講話をひらきたるは、兩者共に美事なりと云ふべし、

こゝに不思議なるは各宗清僧間に肉食妻帯論の沸騰はなり、彼等の妻帯論は偶々以て彼等自身の行爲の腐敗せるを證明するものにして、これ教界の陋醜にあらざして何ぞや、

村土博士の脱籍に付ては世上幾多の評あり、局外者は多く博士に味方し内部の徒は多く之を攻撃するもの、如し、古より傍觀者明なりと云ふ、然らば局外者の評取るべきか、吾人は未だ何れか是、何れか非なるを知らず、今年に至りて宗教雑誌の發刊されたること夥しきものあり、吾人の目に觸れたるもののみにて、精神界、清新、高輪學報、凡聖等にして其他數種あるべし、地方にて發刊されたる分を加へば無論數十種に上るならむ、就中精神界は精神主義を標榜して起れるもの、思想界に一新氣運を開きたることは明なり、評するものあり曰く、精神主義を唱ふるもの多く極端に馳らざるなく、殆ど常識の軌道を逸したるの憾みあり、未だ深く道に入らざるものをして之を開かしめば、深山幽谷の裡に彷徨躊躇せしむることなしとせず、是れ甚だ危険なる主義なりと、當れるや否やを知らずと雖、盗みたるものを、罰するならば、盗まれたるものも罰せざるべからずと云ふが如き詭辯を弄する精神主義は吾人の喜ばざる所也、要するに本年の宗教界は多少活氣の見るべきものあり、宗教の刷新を呼び起したる如き、信仰の鼓吹に熱注したるか如き、其結果の善悪は知らずと雖も、教界の現象として甚だ喜ばしき事ならむ、そもこん年は如何ん、悲むべきか泣くべきか、將た喜ぶべきか

田中正造氏

前代議士田中正造氏は洵に正義の人也、十年一日の如く鐵毒問題に熱注し殆ど寢食を忘るゝに至る、鐵毒問題の爲めに財産は勿論一身を抛つても其素志を貫かんとする鐵石の精神に至りては今世希に見る所なり、社會に訴へ、議會に訴へ、法廷に訴へ千泣萬哭すれども尙目的の達せられざるに於ては、何人も悲まざるを得ず、况や田中正造氏に於てをや、足尾銅山鐵毒地被害の人民は三十萬以上にして、土瘠せ草枯れ、木倒るゝの慘狀は殆ど目もわてられずと云ふ、歳々年々人口増殖する我國に於て、獨り歳々年々減少しゆくものは鐵毒被害の地なりと以て飲食物の如何に鐵毒を含むと知るに足らむ、此慘劇を見るに忍びず、被害人民を救済せんため、議員を棄て、妻子を棄て、一身を鐵毒事件の犠牲に供したる田中氏は去る十日畏れ多く還幸の御通路に拜跪して替下に直訴せんとしたり、これ豈明治聖代の大珍事にあらざるや、吾人は此珍事をさゝ只恐惶措く所を知らず、只此に其梗概を報道するのみ

彙報

●曉島青鬼、林志我、近藤林葉、山田夢白の諸氏は來年一月より「詩」を題する新俳詩専門の雜誌を發刊する由。
●大谷派にて教育諸論を開くに付き、東京よりは清澤、南條齊藤の諸師西上されたり。
●從來神官僧侶にして小學訓導をかねるには種々面倒なる手数を經ざるべし。

らす、之が爲め、雇傭の困難一方ならしり、今同内務文部兩省協議の上各府縣に於て隨意之を處理せしむるの訓令をなしたり
●去る十日小石川宮内院に於て四恩派爪生會の例會ありたり
●神社局にては淫祠取締を勵行せん爲め、神社の大淘汰を行ひ神聖なる神の外は悉く之を廃止せんを以て目下取調中なりと云ふ
●曹洞宗高等中學林同窓會より「清和」を云ふ雜誌發刊されたり、斯界の爲め喜ぶべし

紛々録

●秋月得生軒と云ふ人は今の秋月新太郎氏の父にして、儒にして、兼ねて念佛を喜ばれたる人なるが、先年逝去したる書家長三洲の父と友人なりしと、然るに三洲の父はじめは僧家に生れたるも、還俗の後排佛家となりたるを以て、此人の來訪ある毎に家人を戒めて佛教の談話を固く禁せりとぞ

●或時此人新太郎氏を拉し、書肆に到り頻に古本をあさりしに、浪華の漢詩人篠崎小竹の藏書の捺印あるを見て、小竹の所有なるを知り之を購はんとし、付て其價格を問へば二朱なりと答ふ、得生軒乃ち新太郎氏を顧みて曰く主人は此書の價值を知らざるものなり、吾將に一分を以て購ふべしと、遂に二倍の價を拂へしと云ふ

●一書肆の主人來りて徂徠の詩卷を示す、得生軒唾涎三尺おく能はず、付て其價を問ひ且財囊を検するに書肆の答ふる所に充たず、爲めに買ひ求むる能はずして止みぬ後ち人に語りて曰く、マケヨと云へば恐くは吾手に入るべかりしに、去りながらマケヨと云ふことは余の甚だ好まざる所、マケル人多くは奸商なりと、如何に眞面目にして其性行の潔白なる想察

するに餘りと云ふべし、今の大言壯語を吐く書生輩一顧して可なり
●秋月新太郎氏も佛教の篤信者なるが如し、左の詩に徴して明なり

念佛殘燈碧。 讀如是我聞。
未醒人世夢。 一磬渡寒雲。

●顔面蒼白形容枯槁せる人は、非常の陰險にして狡猾なりとシーザーは云へり、果して然るや諸君と共に之を檢せん哉

雜錄

精神講話
每日午前九時より、本郷森川町一番地浩々洞にて開く。

先德餘香

(其九)

高陽生

●五乘院の少壯時代と老後、東海講師が中年時代には、宗名争ひに畢世の力を盡された事は前に申した通りであるが、此講師の少壯の時分に付て面白き逸話を聞いたから、眞偽は知らないが書き付けやら、講師が若い時分、京に出で、高倉學寮に在り、若氣の至りといふものか、五條橋下の或る青樓へ通ひ、一傾城に深く馴染で學業も出來ず父兄より送金もして呉れぬ様に成なからぬと駄目と自分で諦めて歸國することに決心して、夫から染馴の妓を訪ひ子細を話して訣別を述べ

たすると妓も其親切に感じて、是から後は妻が學費を都合して送るから留りて學問をして貰ひ度いと勸めたが、「今までは善く欺まされたがモーン」は、「一と袂振り切りてस्ता」歸りて來ると、妓は跣足で逐ひ掛け來り、大津まで來て追ひ付いて、是非一度歸りて下さいといふから、夫ならとて歸りて、又勉強に掛られた、夫から傾城は毎日錢百文づゝ仕送りをする、五乘院も其厚意に感じて、夜を日に繼いで勉強して成功した、然るに師が學業成就して世に出られる時分に其妓は慕なく彼世の人と成た、夫で講師大に悲まれたが仕方が無い、後々までも立派に法事供養を営まれたといふこと、又師が高倉大學寮の講師になられたは、文政四年五月で七十六歳の時である、當時深慮宣明等の後を受けて益高倉學寮の學風を振興せられたことは言ふまでも無いが、其頃師は坐右に火鉢を置いて、小鍋に米と小豆を入れて懸け置き、粥に煮ゆるを待て食するが常で有て、日々小豆粥を小許づゝ食されたといふことである、文政十一年八十三才で入寂せられた。

◎易行院法海講師 五乘院風景師に繼いで講師と成た人は此易行院である、師は日南と號し又橋州とも號した、肥後國八代光徳寺の住持で有た、此人には名高い逸事がある、師は丁度頼陽山と同時代で有て、學徳兼備聲譽一世を厭して居た、時に山陽は京師に居りて日本外史を書いて居たが、法海師の評判が餘り高いので、一度而晤したくと思つて、幸に師の弟子大舎といふは山陽の友達であるから、之を介して法海師に面

會を求めて、將にの室に入らんとする時、海師は會、經を閱して居たが、山陽の來たのを知りて、聲高に曰うには、安藝に頼久太郎といふ者ありて、年少くて老親を捨て、主君を捨て、他郷に漂遊して、頃日京都に居て、放浪不羈少しも身を修めず、曾て國に在る老親を歸省したこともない、而るにおこがましきも近來書を著して、忠臣楠公を傳せりと、誠に無禮の至なり、斯る不忠不孝の徒何ぞ忠臣の心を知るべき、其久太郎とは即お前の事かと、意氣極めて勵然として居た、流石の山陽も大に慚愧して頭を拾ぐること出来ず、退いて大舎に謂て易行院師は寔に一宗の學頭なりとて、寓に歸りて直に行李を整へ、明早朝出發郷に歸りて母を省し、其後孝養怠ら無つたといふ。

◎雲華院講師 とは即ち山陽を法海師に紹介した大舎師である、豊後國古城正行寺の住職で、法海師に繼いで講師職に上り、香樹院徳龍師と共に學頭で有たが、磊落倜儻小事に拘泥せず、曾て己れの師匠の易行院は錢が欲しく無いやうな顔をして居て欲しがつた人だが、己は欲しいやうな顔をして居て、ソシテ矢張欲しいと言はれたと、此一語以て師の人となりを知り、推知する事が出来る、一蓮院秀存師なども欲は餘程深い人で、何程信用して居る弟子などでも、若も金錢の事を言はうなら、サツバリ見限りて仕舞はれたといふ事だが、何人も錢の欲しく無い人は無いと見える、山岡鐵舟翁が曾て

錢有れば有るにまかせてはしくなる
無ければ無いで猶はしくなる

大草慈善出獄人保護成績報告

- 一 明治三十年二月特赦御發令に仍り東京市小石川區大塚町に保護所を設立し同月二十日より保護に従事し三十四年十月末日迄の成績左の如し
- 一 明治三十年乃至三十四年十月末日迄保護せし人員は八十四人内七十三人は保護を解き現在の被保者十一人なり
- 一 此保護延日數一萬二千四百三十六日一人の平均數百五十二日とし最多數の日は十四人最少數の日は一人とし之れを平均すれば一日七人三歩とす
- 一 保護者七十三人の成績を舉れば別表の如く保護中死亡せしもの二人失踪せし者九人内再犯入獄せし者四人(廿七號、卅七號、七十號、七十號)
- 一 保護中嫌疑により警察に引致せられし者二人(六十七號)あるも犯罪なく直に歸宿せり
- 一 保護後罪を犯し入獄せし者あるとを未だ聞かざるのみならず改過遷善の効果ある者は十二人(九號、十八號、卅號、卅一號、三十七號、四十二號、四十四號)とす内五人は管理者の周旋にて各妻を娶り已に子を挙げし者あり該人等は最も睦く渡世し親屬故舊に齒せられ後慮なき者とす
- 一 保護中損失を掛けし者は前記失踪者九人中七人にして飯費を償却せざる分金拾八圓餘衣服料金貳圓五拾餘餘藥費金壹圓合計金貳拾壹圓五拾餘とす
- 一 二十日以上病に罹りし者三人あるも別に救助せしにあらす只特約ある施療醫の恵みを受けたるとあり

といふ狂歌を詠まれたは、人情の至微を穿て居る、
◎講師の磊落 世には磊落な學者も随分ある、昨年入寂した廣陵了楚講師の如きも、一醉陶然とした時は、古稀の老齡に及んでも裸躰跣なごせられたと聞いて居るが、大舎師の如き磊落なのは餘程珍し、越中禪一つで酒を飲んだり、書物を見たりするのは常の事、鬮を畫くが得意で有て、揮毫中に風なき吹き來て謝儀の包を吹き飛ばす如きあれば、ア、少し許り禮を持って來たなど、其人の面前で言ふ、禮を持って是て多いとアア澤山持て來てモー一枚まけてやろよと、其言ひ振り如何にも洒落淡泊で、何人も却て感心する、或時枕屏風を持って來て講師様何か御揮毫を願ひ度といふ者あり、オイヨシと引受けて、屏風一杯に大きな陰莖を書いて、コレ澤山だど、講師曾て千利久の像に贊して、
釋迦は人を佛にし、孔子は人を仁にす、
大膽なるかな、利久は人を茶にす、

と言はれたが、講師も亦人を茶にするものか、
◎大行寺信曉師 この人は佛光寺派の學頭で有て、其著山海里を見て、其博覽多識の程も知れる、殊に天文の事に詳しく佐田介石師の師匠である、或る時大舎師と共に、伏見の代官所に招かれて説教した、其時に大舎師は先に説教して、聖人一派の御文の讀題で辨じた所が、一向に評番が善く無つたら、そこで信曉師は考へて論語の中の語を讀題として話したら、大に感服せしめて評番を取た、

正前、前號「佛徳餘香」其七とあるは其八の誤

一死亡者二人は淺草門跡に於て假葬し白骨は郷里に送り其費用金凡そ十五圓なり

事務に關する件

一被保者に對する訪問度數千五百七十八度、一被保者の發信五百六十八度、一被保者の受信三百八十度、一被保者の親屬故舊にして管理者を來訪せし數五十三度、一管理者より發信數式二百五十八度、一管理者の受信百八十九度、一管理者の被保者親屬故舊を訪問せし數五十八度、一授業上に關する訪問數三十八度、一監獄及警察署に出頭せし數百八度、一警察署並に内務省官吏の臨檢數八十五度、一教誨師の臨席數七十六度、一期業に關する來訪者の數三十八度、一被保者の稼業は豫め大工、左官、活版、土工、新聞牛乳配達、馬車鐵道雇等なり賃錢は一日凡そ金七十錢、三十錢、二十錢とす三十錢以上を得る者は貯金を爲すも二十錢の者は漸く糊口を凌ぐのみ

創立に關する諸費

一總金千七百七圓參拾貳錢八厘

内譯

- 一金百參拾八圓參拾貳錢八厘 小石川區大塚町ニ創立セシ諸入費
- 一金六拾七圓 板橋町ニ新築地所開設ニ要シタル諸費
- 一金九拾八圓 板橋町民ノ故除出決ニ要シタル諸費
- 一金五拾圓 受負大工ニ送約トシテ支拂
- 一金六百六拾圓 現在ノ家屋購入及建増費
- 一金六拾圓 借家敷金
- 一金參拾八圓 水道設備費

一總金一千八百八拾九圓五錢貳厘 三十年二月乃至三十四年迄ノ費

内譯

- 一金參百拾七圓貳拾七錢六厘 三十年二月乃至三十一年五月三十一日迄ノ費
- 一金四百七拾八圓 三十二年一月一ケ年費
- 一金四百七拾圓 三十三年一月一ケ年費
- 一金三百九拾貳圓 三十四年一月一ケ年費

一月一日 發行の政教時報に、新年祝賀の廣告を認

まる、方は、本月廿二日限り、規定の廣告料を添へて申込まるべし、又一月十五日發行の分は本月月末限りとす、政教時報廣告掛

信界

人の我を憎む時に

百目木劍虹

血を以て血を洗ふ、斑々たる血痕恐くは、拭ひ去らるゝの時は永久來らぬであらふ、火を以て火を防ぐ、火勢益々炎々消ゆる時はなかるふ、然るに此明白なる道理があるにも拘らず、我々同胞は些細な事柄より互に惡み惡まれつ、果ては摺み合杯して所謂怨を以て怨みに酬ゆることあるは決して珍しくなる、目に一丁字なき無智文盲の輩が執念深く其人を怨

みに、思ふは、聊か憫むべき點ありとするも、立派な教育を受けた人間同士が、蛇蝎の如く忌み嫌ひ種々の方法手段を以て讒誣中傷するが如きは、毫も謂れなき事であつて其人の性格は如何にも劣等に見え、そして甚だ卑怯な行動であるといはぬばならぬ。

全體人を惡み怨みに思ふ情の起るは、他に原因もあらふが、多くは利害得失より打算し來る事で、此の利害關係を除き去ては、人を惡み且つ怨に思ふと云ふやうな紛争の種子はなほ管である、我々常に曠志の焰をもちやしつゝあるは、全く利害問題より外なしと斷言しても差支なからふ、彼の代議士選舉の時を見てもわかる、乃ち彼等が盛に競争し、烈しく運動して互に敬視するは、つまり代議士の月桂冠を戴きたいと云ふ慾望の念があるからである、又友人の名聲隆々として揚がるに引き換へ、己れ獨り逆境に瀕し苦み悶ゆるの時、其人をそねみ憎むの情は禁し得ない事がある、或は又商人同士が商法上の事より商敵となること度々ある、何れも皆利害問題より起らぬものはない、そして之が社會の現象であるとは、誠に淺ましき次第である。

抑々人を惡むと云ふことは一方から考へて見れば、極めて度量の狭まゝいと云はねばならぬ、度量の狭まゝい人間と朝な夕な交際することは、如何にも危険な話で、我々が熾火山の火口に腰を据ゑて居るやうなもので、何時生きたまゝ火葬さるゝかも知れぬ、度量の狭まゝい人に固より嫉妬のものあるべき筈はない、かゝる人こそ却りて自利心の深いものである、古

より驚天動地の偉業を企てた人多くは無慾者で、海潮の度量を有する人のみである、最も無慾は大慾に似たりと云ふ事あるが、かやうな意味の大慾は害を貽さぬばかりでなく、寧ろ國家の利益を資するものである、豊臣秀吉の如きは無慾の最も大なる一人であらうと思ふ、乃ち秀吉が病革やかなるに及ひ家康を顧みて「天下は一人の天下にあらす幼主を補佐し得べくば任せよ、然らざれば卿之を取れ」と云ふたそうだが百戦血を流して得たる天下の覇權をば塵芥と同様に惜げもなく與ふる杯、如何にも秀吉の氣宇瀟灑として廣大無邊測り知るこ

とが出来ぬ、元來人に憎まれるといふ事は氣持のよくない話である、其氣持のよくないと云ふ觀念の起るのは、何か自分に後る暗い行爲があるからである、萬事我身に覺えなくして惡まるゝと云ふ事は理論上ない筈である、若しあるとすればそれは惡む人の誤解であつて心配するに足らぬ、人は決して故なく憎むものでない併し我を愛する人には瞞腹の精神を捧て感謝の情が油然而して起る、所謂士は己を知るものゝ爲めに死すとは此時の場合であらふ之に反して人に憎まれる時は、自分も同時に其人を惡く思ふは普通の人情である、之が爲め今迄親しくした人に途中で遇ふても一言も交へないやうになる、古の武士が互に白刃を閃めかして火花を散らして果し合をしたのもかういふ時である、臨分今の世でも絶交して居る人は澤山ある、近頃の新聞に大坂邊の博徒の或親分同志が決闘して双方共に重傷を負ふたことを書いてあつたが、原因は勿論利

慾より起つたのである、獨り個人と個人との憎悪ばかりでない、國際間の葛藤絶ゆることなきは、全く利害問題より外にないのである、かやうに考へれば我々は殆ど利慾の肉塊であるといふても過言ではなからふ。

我等は自身に多少の欠點あることを認めてをるから、他人より怨まれ憎まれてをることは邪推かも知れぬが畧推察が出来、時としては自身か他人を忌み嫌ふこともある、かく互に憎悪の念を抱き不快に思ふは、これ凡情の然らしむる所何人も一度は起さぬものはなからふ、併し人に憎まるゝのは自身に非難さるべき點あるからである、人の我を憎む時に其人を怨みに思ふは間違である、自覺せねばならぬ、我を憎む人は寧ろ我によき教訓を與ふる師友であると思ふやうにならねば真正に自覺したとは云へぬ、廣い意味で申さば、世の人は皆我恩師にして敵は一人もなると信するのである、男兒門を出つれば七人の敵あるとは昔よりの諺であるが、是は敢て敵あるにわらず、我々の行為に注意を促した警語であらふと思ふ、よし我々にあだする敵ありとするも、愛に及向ふ敵なしで我は之を恩師として我赤心を盡さば、敵の怨みはいつしか氷解するの時はあらふ、若しも敵を敵として相對抗するに至らば所謂血を以て血を洗ふの類で、平和の光は永遠に望むことは難いであらふ

要するに我々はあまりに思慮作爲することは慎まねばならぬ我心の邪なる計らひによつて新に罪を造ることは敢て珍しくない、虚心氣を平にし淡々として淡々と水の如き心地にならねばならぬ「駿臺雜話」の中にこういふことが書いてある

北國にいやしき工の飛彈山にゆきて杉を採りてへきて生業とす者ありき、ある時山中に杉をへきて居けるに、ひとり山伏の鼻の隆きか來りしを見て、心に不思議の者かな、天狗にやとおもふに、汝はなにぞ我を天狗とおもふぞといふ、はやく去れかしと思ふに汝はなぞ我をいとひて去れかしと思ふぞといふ、何にても心に思へば、はやしりてとかひる程に、後は是非なくうのへきし板のなかくはへたるを纏めて繩して括らんとしけるに心ならず取はずして板はねける程に、其板の末、天狗の鼻にしたまかにあたりしかば、汝は心ねのしれぬ者かな、恐しどて行きさりぬるとぞ云々これは甚た面白く而も味ふべき例話であると思ふ、彼の人はいを憎み我を怨みに思ふものであると、自ら思慮し作爲するは却て苦悶の起り心源存養の上に於て著しき妨害を來すものである

私は此頃早起霜枯れの庭園を眺むるに、四時其色を變へざる常盤木と雖も、嚴霜に打たれいたく萎れかゝりて正氣なく見ゆるが、それが日午に至れば強き光熱を受ける爲め、生々ど嚙々の状を呈して來る、我等も此常盤木と同じく、敵と呼ばれ怨に思はれて打撃を被るときは、何となく、胸中悶々として懊惱に堪えない事がある一朝翻然として大慈大悲の如來を思ふと同時に、俄に暗處より光明懷裡に攝取さるゝ心地かする、此時我の苦悶頓に去りて胸中亦一點の纖雲を認めないやうになる

佛教講話録

菊版 三百五 十餘頁

○定價 一冊金四拾五錢○郵税八錢○切手代用一割増

禪海一綱	前田 慧雲	佛教教義上の唯心説を辨し併せて彌陀の實在を説明す黒田眞洞
佛敎雜話	加藤 行海	四國無碍 清澤 滿之
見于獅子譬喻	村上 專精	日本佛敎の特色 前田 慧雲
佛敎の東漸	榎木 慈薫	ヘルゲマン氏の佛敎の意義及可能 熊谷 五郎
法華支那綱目	道重 信教	西哲の星雲説と佛敎の器世間論 伊澤 修二
孝行談	南條 文雄	唯識哲學を評す 中尾 教嚴
學佛者の用心	本多 辰次郎	宗教の基礎 堀 謙徳
神佛二道の調和	井上 圓了	佛敎道徳の大意 齋藤 唯信
余か所謂宗教	森 達立	信州所感 眞岡 湛海
佛敎道徳の大意	森 達立	

難澁の術語を羅列したる佛敎書は多し難解の字義を解して然も大體の精神を失したる佛書は更に尠からず、今の佛敎界に病むところ洵に教育ある社會に向て驚かすに足るべきの良書なきにあり、本集は明治三十三年七月駿河沼津に、翌三十四年七月信州善光寺に開きたる第九十兩度の夏期講習會に於て敎界の龍象が各自獨特の研鑽を披歴し學術的に然もまた簡明平易に佛敎の眞髓を發揮せられたる金玉の講演を蒐集したるもの、讀者一度巻を採て熟讀頑味せんか佛敎の眞精神躍如として紙面に躍るものあるを見ん、本集の如き庶幾くは以て世の教育なる有道の士に向て一讀と徳惠するに足らん哉

發行所 東京本郷 森川町一 **大日本佛敎青年會**
取次所 同 大日本佛敎徒同盟會出版部
同 本郷四丁目 文 明 堂

新刊紹介は次號に譲る

十一月十五日發行

- 坊守教育……………主 義 加藤咄堂
- 他力教と婦人……………小原天華
- 白鬚微……………記 者 逸名氏
- ビスマルクの母……………雜 纂
- なさけ……………全
- 乳房の注意……………全
- 落葉片々……………全

光の庭

定價 一冊金五錢 一ヶ年前金 五十錢

- 噂さに就て……………渡邊さむ子
- 下野の忠女さつこの傳……………内藤耻叟
- 降り晴……………竹柴の浦人
- 空気の咄……………雜 纂
- 文の園……………全
- 雜報……………全
- 新刊……………全

發行所 東京京橋區築地 三丁目九十二番地 **以文會**

本誌購讀者諸君へ

本會歳末の決算上の都合有之候に付、本誌代未納の諸君は遅くも本月廿八日限至急御拂込被成下度候此段殊に御依頼申上候

一々端書を以て御催促申すも、甚た手数を要し煩しく存候間事情御洞察の上宜敷願上候

尙府下の講讀者諸君へは既に集金人差遣し候間疑念なく御拂渡被下度候也

大日本佛教同盟會出版部

◎政教時報合本

自一號 壹册
至三五號 美裝(本)綴

◎政教時報合本

自三六號 壹册
至六九號 美裝(本)綴

右合本希望の方は代金壹册に付郵税共七拾錢相添え本月々末迄に申込るべし、以後は謝絶することあるべし

家庭

第十二號(十二月發行)

- 吾人の男女同權論 治明三十四年を
- 家庭と子供(池田)
- 八福田(村上)
- 死ば幸(永井)
- 佛は力(安道)
- 帶揚の活用法(野天)
- 裁縫(如つ)
- 小袖の裙(本村)
- 日常の衛生(西)
- 料理法(少女)
- 二人の父(杜)
- 磯のやま(日比)
- 雁のゆくへ(幸田)
- 散紅(葉)
- 和歌(名)
- 看病婦(小谷)
- 山茶花(日)
- 夜半の燈火(夢)
- 國歌(素)
- 解釋(近藤)
- 漢詩小話(流)
- 小黃昏城(ん)
- 彙報數件
- 新刊批評
- 薄水遺稿
- 御一代書聞記說教
- 家庭の新風味

發行所

家庭發行所

東京本郷森川町一、二四一

故老川古河勇著

老川遺稿

全

圖管長釋宗演禪師題字 釋宗活禪師述

定價金二拾五錢 郵税金二錢

發行所 東京神田區佐久間町四丁目十六番地 東京神田區駿河臺町紅梅

大賣捌 光白融鳩社

宗教を求むるの聲一般に高くて而も其真相を開くの書乏しこれ斯界の憾とする所、本書は、かの鎌倉楞伽の老師の高足にして大事了畢の後久しく暹羅に遊ばれたる釋宗活禪師の歸來來參居士の爲に擧揚せられし法語にして本社殊に請ひて弘通を許されたるもの總て「佛敎總論」「佛心宗史」「宗意」「入道要訣」の四章とも簡明の筆を以て系統的に禪門の大意を傳へ餘蘊なからんことを期せられたるものなりしと譯は我國中世紀以後極めて世道人心の感化多かりし教、性海一滴は其然りし所以を傳へ更に現時に於て求めらるゝ宗教の上に一大解答を與へんとするなり

天下に率先して新佛敎の旨義を鼓吹し不幸中道にして病に斃れたる故老川居士古河勇君が十九より二十八歳世を辭するに至るまで成れる百四の雄篇と十四の書簡とを收む、文は文學宗教政治社會に涉り議論あり叙事あり大作あり小篇あり、判別四百二十百悉く一讀を償さるはなし、而して更に之に添ふるに大内青巖居士の題咏、圓覺寺派管長釋宗演真宗本願寺派勸學島地默雷兩師の題序、及編者の老川略傳と老川が寫真版肖像四個とを以てす、此書も亡友の紀念の爲に出版して同人の間に頒てるもの初より廣く天下に販賣せんとせしもの非ず、今配附を了りて、多少の餘冊を存するを以て此に印刷出版費並製金五十錢郵税八錢 上製金八十錢郵税十錢を以て同好の士に頒たんとす

大發行所

本郷四丁目 五番地

文明堂

佛教清徒同志會

鷄聲堂

文 學 士 內 田 融 著

モルモン宗

モルモン宗は海
 りて米國が來れり、世人は
 彼を歓迎せんとするかモル
 モン宗は我同胞の間に傳へ
 られんとす、世人は彼を信
 奉せんとするか、彼宗果し
 て如何なる教ぞ、彼宗傳道
 の結果如何、是れ識者の夙
 に憂ふ、本書は詳しく
 なる所、本書は彼宗の
 成立の歴史を尋ね審かに教
 義の組織を説き更らに米國
 政府と彼宗との關係を明か
 にし、彼宗の現時の勢力の
 由て起る所を論究せるも
 の、宗教家は勿論世教に志
 あるの士は一讀して彼宗の
 性質を明かにし再考して對
 モルモン宗の策を講せよ

發 賣 禁 止 學 著 者
 善 魔 子 青 柳 有 美 新 著

有美臭

著者の奇
 想奇文世
 既に定評
 あり題し
 て臭とい
 ふ其ブン
 プンとし
 て鼻持ち
 のならぬ
 か或は一
 種各別の
 臭あるか
 は發刊の
 上に於て
 るべし知

海 老 名 正 先 生 序 文
 島 田 三 郎 先 生 序 文
 齋 木 仙 醉 著

文明主義

文 明 主 義
 の 日 本 文 明 主 義
 は 歐 洲 文 明 主 義
 の 本 質 的 基 礎
 本 質 的 基 礎
 歐 洲 文 明 主 義
 の 本 質 的 基 礎
 本 質 的 基 礎
 歐 洲 文 明 主 義
 の 本 質 的 基 礎
 本 質 的 基 礎

發行所

東京市本郷區四丁目

文明堂

(美 裝)

定價金三十錢
 郵税金四錢

定價金三十錢
 郵税金四錢

明治三十五年一月元日發行 (製本十二月廿五日完成)